【 やりとり １ 】子どもとのやりとり＝専門性の柱のひとつ

保育士は、子どもを育てる専門家

保育士は、子どもを育てる専門家です。子どもの親（保護者）ではありません。保護者には日々の生活がありますし、それが子どもとのかかわりに影響を及ぼすことも多々あります。 ★『ペアレント・ネイション』

ですが、保育士は個々の子どもの成長・発達を最新科学に基づいて理解したうえで、子どもの育ちを最優先に置くことに誇りを持ち、仕事をする専門家です。

子どもたちが安全に、穏やかに毎日を過ごすことができるように取り組む。それは保育に最低限、求められるものですが、その取り組みだけでは保育の専門家とは言えません。

専門家としてまず重要なのは、**乳幼児の脳発達に合ったかかわり（やりとり）**をすることです。生後すぐの乳児でも、身近なおとなが目を見て、言葉と表情でやりとりをすれば、応えます。**子どもを発信主体として**やりとりをすればするほど、子どもの応答は豊かになり、おとなは子どもの応答を理解しやすくなります。子どもも、おとなの応答、言葉をいっそう理解していきます。乳児期からこれを続けることで、子どもとおとなのやりとりはスムーズになり、どちらも不快やいらだちを感じることが減ります。複数の子どもとかかわっている保育者は、個々の違いにも気づくことができます。

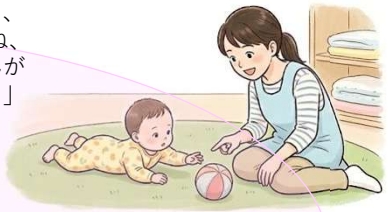
そして、こういったことすべてを個々の保護者に伝えることは、自分の子どもとのかかわり方を保護者が学ぶ大切な機会をつくることにつながりますし、一方で、専門家としての保育者の誇りと「もっと学ぼう」という動機を育てていくでしょう。

あたたかで、穏やかで、具体的なやりとりが子どもの脳を育て、
子どもとおとなの間の信頼関係、つながりを育て、
子どもに対するおとなの関心も育てる

→ くわしい具体例は【やりとり 2】以降

「〇〇ちゃん、目が覚めたの？ ニコニコしているね。〇〇ちゃんがニコニコしていると、私もとっても嬉しいな」「（口を開いて音を出す）」「（口の動きと音をまねてから）そうだね！ 〇〇ちゃん！」
（生後４か月でも、話すと笑顔で返事するんだ。口も私の言葉に合わせて動いていて、すごい！）

「〇〇ちゃん、ボールがコロコロ。ほら、手が届いた！ コロコロすると音がするね、中に鈴が入っているんだよ。〇〇ちゃんがさわるとチリンチリンって音がするね。」
（私が指さして話しかけると、ニコニコしながらハイハイする！ 嬉しいな。）



「〇〇ちゃんが大好きなお歌を一緒に歌おう。（一緒に手を動かしながら、歌う）」
（〇〇ちゃんも口を一緒に動かしてる。これが発語の練習になるんだね。）

気づいたこと、調べたことを園で話し合い、それぞれの専門性（栄養士、調理師、看護師も）、異なる視点から意見をはっきり言い、園全体の引き出しを増やしていく。

「〇〇ちゃんはどうして～をしたんだろう。この発達段階では…」。自分で調べてみる。

「自分はこうしたい」「こうすべき」ではなく、今いる一人ひとりの子どもに合わせて多角的に、柔軟に。

製品やサービスを売るための情報、科学的根拠のない情報、「この方法ですべて解決！」というタイプの情報は要注意。情報はすべて、まず疑ってかかること。AIの情報を鵜呑みにしないこと。

製作：掛札逸美、青柳淳子、小倉北ふれあい保育所、。写真の著作権は小倉北ふれあい保育所。イラストはGeminiによる。未就学児施設の職員が保育に用いる以外の利用は一切お断りします。このシートをコピーする時は、必ずこの文言もコピーしてください。